名古屋
石田学園報
第13号　平成14（2002）．8.15

星城大学
名古屋明徳短期大学
星城高等学校
星城中学校
星の城幼稚園
名英予備校
名英図書出版協会
法人本部

星城大学開学記念式典

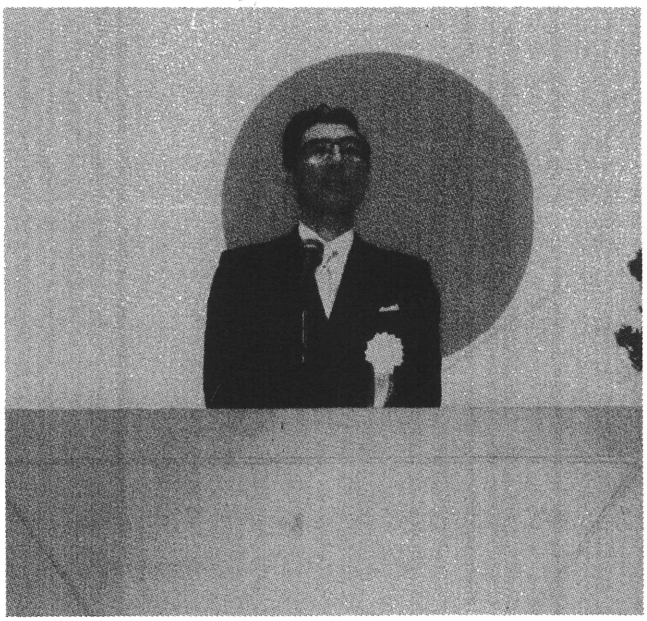
5月31日(金)、星城大学開学記念式典が来賓約500名、教職員・学生が参加のもと盛大に催されました。雨天の中、満員の体育館にて石田理事長・定道学長の挨拶、来賓の祝辞後には、「社会貢献をめざす」をテーマに記念鼎談が開催され、その後中庭特設会場での記念祝賀会へと移りました。

教職員・学生が一体となって来賓受付・誘導・駐車場案内等に活躍し、活気に満ち溢れたキャンパスは、「星城大学」の始動を感じさせ、来賓に高い評価を受けました。

本号では、式典での理事長挨拶と記念鼎談の内容を掲載いたしました。

～ 星城大学開学にあたって ～

理事長・学園長　石田正城



名古屋石田学園は昭和１６年（１９４１年）に、創立者の石田鏇徳が最初の学校、明徳学舘を設立いたしましてから６０年経ちました。昨年の２００１年に満６０年を迎えました。その６０年を記念いたしまして、また創立者の念願でありました大学の設置を計画いたしました。人間で申しますと還暦でありまして、新たな気持ちで再出発をすべく、２１世紀のニーズにあった学問研究の場を志向いたしました。

名古屋石田学園の建学理念は、まず第一に、報謝の至誠、そして文化の創造、世界観の確立、この３点から感謝のできる視野の広い逞しい人材を育てていこうということでございます。創立者は常々私どもに、あるいは学生にこんなことを申しておりました。これは自分の苦学の体験からでありますが「星空を仰げ　希望は燃えなん光とともに」と星に大変愛着をもっていました。そんな建学の精神から星城大学と命名をいたしました。既存の星城高等学校、星城中学校といっそうの一貫教育を進めてまいりたいと思っています。この６０年を振り返ってみますと本当に「皆様方にお育てをいただいた」、この一言に尽きるわけであります。この際、少しでも恩返しができるような内容でありたいと考えたところであります。

大学を設立するにあたり、これからの日本を考えますと、自ら創造していく人材の育成、事業貢献ができる人間の育成の必要から事業貢献を主体といたしました経営学部、高齢化社会をみすえた医療貢献ができるリハビリテーション学部、この２学部に定めました。さらに、教育に責任の持てる教授陣を集めたい、人づくりの大学にしたいと進め、皆様のおかげで無事に船出をすることができました。

開学いたしまして、毎日毎日試行錯誤の連続でございます。「大学運営はやはり大変だな」、こんなことを毎日感じておるところでございます。皆様方には従来と変わらぬご支援、ご協力を賜りますようお願いを申し上げまして開学のお礼の言葉に代えさせていただきます。

星城大学開学記念鼎談　「社会貢献をめざす」

● ● ● プロフィール ● ● ●

赤岡　功
・京都大学大学院経済学研究科教授
・1999年4月～7月
京都大学大学院経済学研究科長・経済学部長
・1999年8月～2001年12月
京都大学副学長

南部　靖之
・株式会社パソナ代表取締役グループ代表
・関西大学卒業
在学中に「人材派遣事業」の同社設立、業界のリーディングカンパニーとなる

定道　宏
・星城大学学長
・米国ジョンズホプキンス大学、ジョージタウン大学院、和歌山大学、神戸大学、京都大学大学院経済学研究科等の教授等として活躍

定道学長：先ほど開学記念式典の挨拶で、星城大学は「社会に貢献する人づくり大学」ということを約束いたしました。そこで、言葉だけではだめだ、中身はどうか、ということを、この鼎談の中で明らかにしていきたいと思っております。

今日は、お二方の専門家をお招きして、ご意見、ご教示を賜ろうとしております。先ほど、ご経歴の紹介の中で触れられなかった部分、つまり、社会貢献に如何にこのお二方が積極的に取り組んでこられたか、という観点からご経歴を私から少し補足させていただきます。

まず、南部靖之さんですが、現在はパソナグループ代表でおられます。１９７６年２３歳のときに、このパソナを創業された創始者であります。以後、パソナは隆盛を極め、今日に至っております。先ほどご経歴の紹介にありましたように、人材派遣業というのは今では至るところにありますが、これを日本で最初に、「女性を派遣」ということから創業されたのは、この南部靖之さんであります。しかも、社会に対していろいろ発言・主張をなさっておられます。まず、日経新聞では「人材開国」で日本に活力を、あるいは「雇用戦略会議の創設を」というご持論を発表され、経済教室でも述べられております。現在は、NHKで放送中のNHK教育フォーラムにもご出演なさっております。

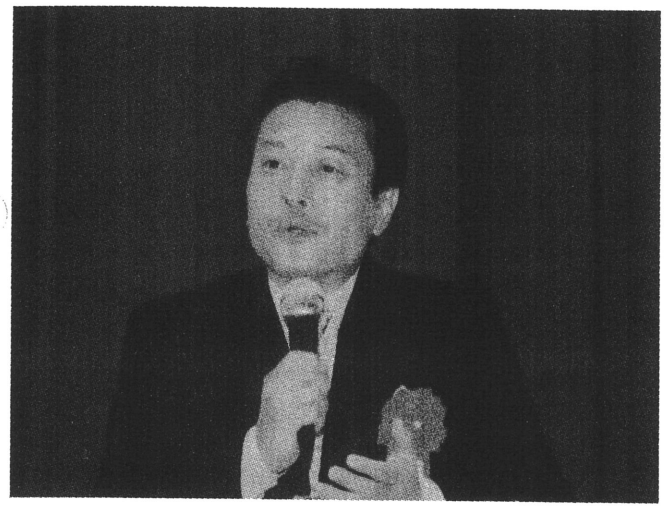
一方、赤岡先生は、先ほどのご紹介のように、京都大学大学院の教授であり、経済学部では、経営学原理、これは、経営学にとって必修科目の一番基本をなす科目でありますが、その経営学原理の担当教授であります。いろいろと多くの著書もありますが、今日のテーマであります「社会に貢献する」ということでは、赤岡先生は「エレガントカンパニー」という名著を出しておられます。また、赤岡先生はNHKの放送大学で経営学入門も担当されていました。赤岡先生は、この星城大学で、特に経営学、社会に貢献する経営学をどのように作ろうかという構想を当初からお考えになられ、その設置構想に基づいて星城大学の経営学部は出来上がっております。さらに、リハビリテーション学部も、21世紀の社会的要請に応えるという、赤岡先生のお考えから創られております。この２学部の組み合わせは、少し奇妙かと思われますが、実は非常に相通ずるところがあるわけです。そんな意味で、今日は、いろいろと星城大学の中身を知り、その中身が単に構想だけではなくて、実社会に創業者として二十数年実践してこられた南部さんのお話を伺いながら、裏付けて参りたいと思います。

それでは、南部さんから企業における社会貢献、あるいは企業理念といった点から創業者精神を含めまして、お話を伺いたいと思います。

南部代表：一番最初にこの大学に来まして、暖かい感じのするいい環境の中にある素敵な大学だな、こう思って、この中に入って一番前に座りながら皆さんと一緒に国歌を斉唱しました。これは非常にうれしかったです。アメリカに３５歳のときに家族を連れて移りました。アメリカに１５年間住んでいます。僕のワイフも子供たちもニューヨークから１時間ばかり上がったところにある、コネチカット州に住んでいます。アメリカに１５年間いますと、日本の旅行者もたくさん来られますし、我が家といいますか、南部ファミリーにも、いろんな良いこと悪いことがいっぱい起こるわけです。その中で、重要な事件が起きた場合に助けてほしい、SOSというふうな場合に、日本大使館がそれに対してきちっと対応してくれるわけです。今はいろいろな外務省の事件もありますけれども。そういう生活をしている中でなぜ日本人は、というか日本の国の方々は、もっと自分の国に対して誇りと信頼というものを持たないのだろう、国歌も歌わない国、それを僕は非常に感じていたわけです。法律を作る作らないはともかくも、今日ここに来て、あぁうれしいな、ということが、このことです。

２つ目。今日いろんな方々、先生方の話を聞いておりました。人づくり、それも社会貢献。こんなすばらしい大学ができたんだなと本当に心から驚きというよりも喜び、感動いたしました。今の世の中というのは経済が最優先です。何よりも経済です。文化と福祉は横に置かれて、企業理念というものは、あるいは企業の経営方針、社長があるいは会長が社員みんなに経営哲学を発表されます。哲学

はともかくも、「わが社は増収、増益をモットーとして」こういう言葉を常に言われるわけです。ですから、「ほんまかいな」と「もっと大切なものはないのかな」と。「確かにお金を作ることも大切だけれども、いや、仕事を作ることももっと大切だけれども、もっともっと大切なことがあるはずだ。それは人を作る、それではないかな、お金よりも仕事よりも人が一番大切だ」と。最近そういうふうに考えていた矢先にこの大学の哲学といいますか、こういう趣旨でこの大学を作るんだということを学長からも、そして石田理事長からも聞きました。で、僕は「あぁ、いいなぁ」と思って、そして今日のこの講演に、もし自分がその場に出席できればいいなと思っておりましたら「南部さん、しゃべってや」こういうふうに言われて、僕がここに寄せてもらったわけです。



まず、経済優先の世の中であって、人づくりをモットーに、これからの２１世紀の社会環境の中で一番大切なこと、それを哲学といいますか、大学の経営方針に入れられて、そして赤岡先生がそれをいろんな意味で援助されたと聞いてうれしく思いました。パソナも今から２６年前僕が作りました。大学の４回生のときです。２０歳のときに僕は、自分で自分の人生を考えました。学生に与えられたものは何か、これは時間だな、アルバイトはできるだけやらないでおこう、友人は夏が来るとデパートにお中元の、冬が来るとお歳暮のアルバイトに行っていました。ウエイトレスのアルバイトも頑張っていたわけです。僕は、家には生活費をお願いし、入学金と学費は自分でアルバイトをして稼ぎました。最小限のアルバイトをし、何をしたかといいますと、あまり僕は勉強が得意ではなかったんです。そこで学生に与えられた時間、これを有効に使おうと。勉強が好きなら勉強する、本が好きなら本を読む、サークル活動もいい、そこで僕は考えたわけです。１年間世界を旅してみよう、その先はシルクロード、インド、ネパール、ビルマ、タイ。これを１年間かけてやろう、ヒッチハイクしよう、こういうふうに思ったわけです。僕は男ばかりの３人兄弟の末っ子です。一番上は勉強が好き、それも数学です。大学院を卒業後、種子島でロケットの研究技術開発を行いました。僕はあまり学問が得意じゃない。父に母に相談しました。両親は「それならば行っておいで」。若い者、かわいい子には旅をさせろ、そういうことで１年間時間をもらって、今申し上げたように、シルクロード、インド、ネパール、ビルマ、タイをずっと周ったわけです。そこで僕の人生を大きく決めるきっかけを得たというわけです。らい病だとかいろいろな病気のある、貧しいといいますか、あの社会を見て、なんと自分は幸せだろう、豊かな社会に自分はいるんだなと、こう感じたわけです。タージマハールを見て、荘厳さといいますか、すごいお城だ、世界一大きなお城だ、すごい、こんなものが作られたんだな、自分は豊かであり恵まれている、そして人生は長い、慌てることはない、こういうふうに思いました。そして大学を卒業するときに、みんなは一部上場、二部上場、誰もが知っている有名な企業に就職活動をしていったわけです。でも僕の場合は、たった一度しかない人生、二度とない人生だから恵まれた環境の中にいる自分を生かさなければこれはもったいない、そういうことから自分で事業を起こしたわけです。会社のイロハもわからない、人脈もなければ、お金もない、社会からの批判・無視、いろんなことが起こりました。大学の学生のときに作った会社が今は一大産業にまでなったわけです。小泉政権のセーフティーネットの雇用促進の一番の重要課題にまでなっていったわけです。２６年間、まったく会社のイロハもわからなかった学生が、今では、こうして今日もここでしゃべらせていただけるようになりました。なぜ?。これを先ほどから考えておりました。多分、こういうことではないかと思います。もし、その要因を挙げよと言われるならば、１つ目に、会社の理念、創業の精神、これが「社会貢献をしよう」ということ。これが会社の経営理念の一つになったわけです。そのときは３つの経営理念がありました。２６年前に一番最初にみんなの前で、みんなと言っても社員は２人しかいませんでした（月、水、金のアルバイトの女性と火、木、土の僕の彼女、今のワイフです）けれども、その２人を前にして３つの経営哲学を発表したのです。それは今現在でも、経営理念となっています。

１つは社会貢献をしよう。「儲かったらやりまっせ」、儲かる、これを自分の使命としてもしやった場合に、儲からなかったら、「やめた」というふうにあきらめます。けれども、社会の雇用の問題に取り組もう、それで社会貢献をしよう、こういうふうにビジョンを明確にしたわけですから、途中で辛いことだとか、いろんな問題がありましたが、何とか頑張りぬけた、そういう気がするわけです。２つ目は文化創造でした。全く同じ理念でありまして社会に貢献するならば、その地域の方々の仕事を通して、文化の育つようなもの、そういうものを自分は何とかやってみたい、こう思ったわけです。

３つ目は社会福祉事業でした。社会貢献事業、文化創造事業、社会福祉事業、これが学生の２６年前に私が考えて、そして今現在でも変わらないわけです。大義名分、これは非常に大切なことではないかな。社員が２人から１０名、１００名、１０００名、２０００名と増えていったわけです。でも、この大義名分が社員の結束力といいますか、やろう、これだけやろう、頑張ろう、そういう熱意を消さずに夢を完結させてくれたわけです。僕の好きな言葉に「正々の御旗、堂々の陣」皆さんもご存知の正々堂々ですけれども、正々、正しい正しい、大義名分という正しい正しい御旗があれば、堂々とした陣営が組める。たった２人の社員の陣営、１００人の陣営、１０００人の陣営、今は派遣スタッフが４０万近くになりました。その方々をパソナとしてしっかりと支えなければならない、その陣営を支えなければならない、そういう意味で私はやはり「正々の御旗、

堂々の陣」という言葉をあらためて先ほどここで座りながら考えておりました。まだこれから先、いろんな事業をやりながら問題が起こるかもしれません。しかし、私は社会貢献ということ、豊かさ、真の豊かさとは何、もう何でも買えます、世界中に旅をしようと思ったら、安いチケットが手に入ります。でも、真の豊かさとは仲間であります。誰と仕事をするか、彼、彼女がいるから会社の仕事が楽しい、自分の夢や志に対して一緒に共有しながらそれを調整できる仲間、これが一番真の豊かさではないかな、そういう気がするわけです。売り上げでもなければ利益でもなければ、企業の規模、支店の数でもない。誰と自分の夢を、自分の志を共有して調整できるか。結婚生活ならばその伴侶かもしれないし、会社ならばその仲間かもしれない。それがちょっといま横に置かれて何よりも大切なのは仲間よりもお金だよ、こういう社会全体がなんとなく寂しいと感じたわけです。経済よりも人づくり、経済よりももっと大切な福祉と文化創造、そういうことを本当に今日はあらためて感じさせていただきました。また、あらためてこの後、時間をいただきますので、今一番最初に感じたこと、それから自分の経営理念・哲学を触りだけお話しさせていただきました。

定道学長：どうもありがとうございます。非常に長期的な、あるいは広範囲のビジョンで、その中で企業の活動を見いだされ、これが社会貢献であると。利潤とか儲けというのは、そのような長期的なビジョンではなくて、むしろ短期的、あるいは非常に視野の狭いものである。とにかく儲けるだけ儲けてしまおう、そういう小さな、偏った考え方ではなくて、やはり創業者として、大きく発展するための３つの企業理念を建て、これに基づき、徹底して人づくりをされ、その人たちが活躍されてきた、というように私は受け取った次第であります。それでは、続きまして、学識経験者として、アカデミックな立場から、先ほど申しました「エレガントカンパニー」という名著を残しておられる赤岡先生に、企業とは、あるいは社会貢献とは、今の南部さんの実践的な企業理念とその辺の関係も併せてお話しいただければと思っております。どうぞよろしくお願いします。

赤岡先生：南部靖之さんとお会いできるということで私は今朝わくわくしてここへ来たわけであります。南部さんのことは実は２０年ほど前から存じており、京都大学でも講義で何度もお話しさせていただいたのですが、お目にかかったことはないものですから、憧れておりました。今日はお目にかかれるというわけで、朝、女房に話しまして、「今日は南部さんとお話できるんだよ」と言ってきたのです。なぜ私が南部さんに憧れたかというと、著書の「エレガントカンパニー」ということとも関わるのです。詳しくは著書にございますので、あまり立ち入らずに、ただ今ほとんど南部さんがお話しになったことがその本の方向だと思います。南部さんは先ほどからもご紹介にありますように、今の言葉で言えば、人材派遣業を日本で興した方であります。１９７６年からです。大学在学中にそれを興されたわけでありますけれども、人材派遣業という言葉と南部さんがやっておられることとはちょっとニュアンスが違う。しかし、この人材派遣業が終身雇用の日本の国でこんなに定着してやれるとは思わなかっただろうと思うのです。それがこれだけ大きくなっ

たわけですが、大きくなった内容を１つ先に挙げさせていただきますと、先ほども、「１つの事業になりました」「ニュービジネスとして成長しました」とおっしゃいましたが、その売上高がだいたい１兆円ぐらいだと思います。すでに人材派遣業は去年の８月ぐらいの数字で厚生労働省の調査で１兆６７００億円となっております。だから、はっきりとした１つの実績を残された事業なのです。それを作られたのが当時大学に在学されておられた南部さんです。去年の８月の読売の調査ですと、人材派遣業をやっている業種は９０００社もあるということです。

つまり、南部さんのおかげで９０００人の社長が生まれてくる。これはやはりすごいことです。まずベンチャーを興す、会社を興すということではなくて、事業を興した、これがすごいことです。その事業が実は人材派遣というよりももう少し別のネーミングのほうがもっといいと思うのです。なぜかというと、南部さんご自身が言っておられますが、ニュービジネスではなくベンチャーだと。ニュービジネスというのは、それをやることで新しい事業を増やしだすということで、それで儲けようとする人たちがいっぱいいると、それが経済だと、そういう人たちというのは非常に多い。しかし、南部さんは、一番最初に言われたように、事業を興すことは社会的意義があるという志を抱いて作った。そして文化を創っていくんだ、さらに社会福祉をやろうという志を大事にして、果敢に挑戦していって、そのためにリスクを伴おうというのがベンチャーだ、と。だから、ニュービジネスと本当は言ってほしくない。また、人材派遣というと皆さんの中には、会社のコストを安くするために使われているケースもありますので、少し変だなと思われますでしょうが、誤解の無いように、ここで、南部さんがやってこられたことを要約しておきます。

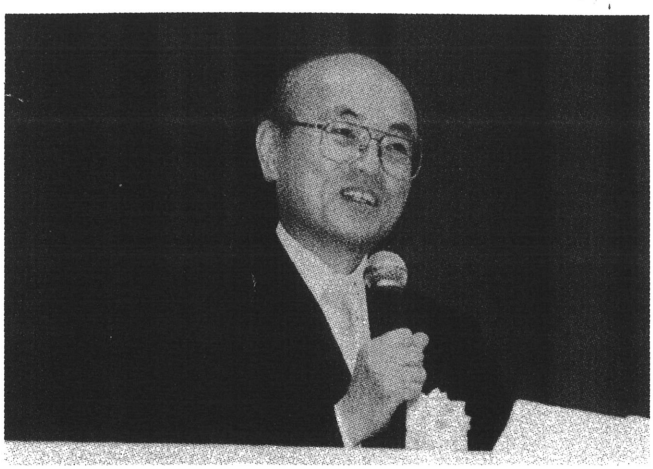
結局のところ、一番最初は、終身雇用で男性中心の社会でした。１９７５年です。そのときに女性が就職しようと思ってもしにくい、それから家庭にいる人が就職しようと思ってもしにくい、それを何とかしようとなると人材派遣が行き着くところだったのです。人を派遣する、店舗などいらない、というわけで、女性の仕事の雇用を創造なさった、それからその次は大学生の女性が就職するときにその雇用の作り方をなさった、さらに進むと、家で子供を抱えた方でも、テレワークといった完全に家にいながら仕事ができるシステムを作り上げられた、そして、さらに言えば、身体障害者の雇用の拡

張をしてこられた。ですから単なる人材派遣というよりも、そういう形を使って人々の働ける場所を作ってこられた、ということになります。

今朝、妻が言っていたのですが、南部さんの話を私が何度もしていましたので、女房の名づけがなかなかうまいなと思ったのですが、結局のところ、「就職弱者の雇用作りね」と一言言いましたが、まさしくそれをやってこられた。だから、会社の利益もありますが、会社の利益だけではなくて、社会的ニーズもそれに重ねます。天才的な経営者というのは大体そういうものであります。利益と社会の発展を重ねます。自動車もそうでしたし、電器産業もそうでした。実は、女性が社会に働きに行けるようになった一番大きな１つは電気洗濯機の発明、あるいはどこの家でもそれを買えるようにしたことです。洗濯を女性に任せておいたのでは女性は働きに行けない。電器産業が電気洗濯機を安く提供してくれたから女性も働きに行けるようになった。なぜ女が洗濯をして男はやらないのかということは、ここでは少しおかせていただきまして、１９７５年以降はこいはナンセンスなことなのでしょう。

「エレガントカンパニー」の話に触れます。南部さんがされましたように事業の経済的なものと社会的意義とを重ね合わせるようなことをやってほしい。もし利益ばかり上げる既存の企業であるなら利益だけでなく社会的意義も考えられるような企業、人になってほしい。それから、いいことばかり言っているのだけれど経済的に不振で自然につぶれていくというような会社があったら、社会的意義のある仕事をなんとかビジネスとして成り立つようにもっていける、そういう人材を育てる。そういうことができる会社はそう多くはありませんけれども、しかし、やはりかなりあります。そのかなりの会社は時間がありませんので省略しますが、「エレガントカンパニー」とはそういうことでありますし、そういうようなことができる人づくりができればなぁ、と思っております。

定道学長：どうもありがとうございました。南部さんの作られた会社、それが「エレガントカンパニー」であるというお話でした。先ほどのお二方のお話を伺いますと私もそのように思います。そういう意味で、赤岡先生のお話に対して、南部さんのほうから簡単ではありますが、ご意見等ありましたらよろしくお願いします。



南部代表：ますますこうして勇気づけられて「南部さん頑張りや、しっかりせいよ」ということが、ばっ、ばっと伝わってきますので、僕も「社会貢献、社会貢献、社会貢献」ということを頭に入れて頑張ります。僕は学生時代にベンチャーを興しました。これは父から怒られて学んだのです。小学校の３年か４年の頃だったのですが、算数の試験がよかった。家に帰って母親に見せるとほめてくれた。親父が夜遅く玄関から帰って来るのを待ちかまえました。１０時か１１時か、玄関から入ってくるなり飛びついてこういうふうに言いました。「算数の試験がよかった。何点取った。誰々ちゃんより何点よかった、誰々ちゃんに勝った」と言いました。ほめてくれるであろうと思った親父は、なんと怒ったのです。「馬鹿もん。馬鹿もん。お前をそんな息子に育てた覚えはない。人と比べて勝った、負けたとは何事だ。たとえ８０点でもその前の試験が９０点だったならば１０点下がったからもっと頑張れ。たとえ３０点でもその前の試験が２０点だったならば、頑張って１０点良くなったんだからもっと勉強せい。人と比べて勝ったら勝ったで天狗になるぞ。人と比べて負けたら負けたでねたみ、ひがみ、やっかみになるぞ。人間にとってねたみ、ひがみ、やっかみは一番醜い」。こう言って、中に入っていったのです。僕は何でほめてくれないんだろう、中学校、高校とずっと思いました。もう１回、高校の２年のときです。数学の試験が悪かったのです。悩んでいました。僕は本当に恥じていたんです。俺はなんて馬鹿なんだろう、何でこんな数学の問題が解けないんだろう、こういうふうに恥じているとその姿を見て親父がこういうふうに言ったのです。「何を恥じているのだ。人に迷惑をかけたときに恥じよ」。これだけ言って中に入っていったのです。僕はわけが分からなかったけれども、高校を卒業して大学で自分の人生を考えたわけです。人と比べてあいつはすごいな、あるいは自分はできない、こういうことを言ってはいかんな。また、みんなが就職するから、自分も就職しよう、これもいけないな。自分の一番得意なものは何か、俺は何のために生まれてきたのか、また、学生時代にインドを旅行した経験も頭の中に浮かんできまして、そして「じゃあ、頑張ろう。」これが僕が最初に事業を興すきっかけだったわけです。また今、横で先生からの刺激を感じておりますので、しっかり頑張ります。

定道学長：社会貢献の具体例、ご体験、自叙伝を伺うことによってその説明をされたと思いますが、それでは南部さんのような人材をできるだけ多く輩出するには星城大学の経営学部がどのような教育をしていったらいいのか、その理念構想を作っていただきました赤岡先生に星城大学のモデルということをお話しいただきたいと思います。よろしくお願いします。

赤岡先生：先ほどから話題になっていますように、星城大学は事業を通じて社会貢献を目指す経営学部とリハビリテーション学部とこの２学部がありますけれども、１つは南部先生のお話にも関わることですが事業を通じての社会貢献は先ほど申し上げました。そして２つ目に高齢者社会を意識して医療福祉・社会福祉に関わって社会に貢献するリハビリテーション学部。社会は明らかにそういう方向に向いているということでありましょう。３つ目で文化ということがありますが、星城大学で人づくりを考えるときに、事業を通じて、医療を通じて社会貢献のできる人を育てるわけでありますが、そのときに、やはり基本になることは人が立派でなくてはならない、志が高くなければならないということで、この大学の一番大きな教

育の特色を大きく挙げれば２つあります。１つは文化教養ゼミということだろうと思います。この文化教養ゼミは、この頃の若い学生と言うとあつかましいわけで、実は旧制高校を出られたくらいの年齢の方々、６５，６６歳以上ぐらいの方々、私はそれよりも下ですので悠々と言えるのですが、６５歳以上の日本人の教養の高さはまったく頭の下がる思いがします。どなたでも大抵見事なのです。私どもはなかなか教養が非常に一生懸命勉強しますが足りません。しかしながら、そういう教養を身につけなければ社会の一流の人間としては通じませんので、何とか教養を高めたい。先ほど、市長からお話がございました細井平洲先生が上杉鷹山の先生でありますし、ケネディ大統領が日本の新聞記者に「日本の政治家で誰を尊敬しますか」と聞かれて即座に「上杉鷹山」と答えた。そのとき平洲も出たようでありますが、日本の新聞記者は上杉鷹山さえ知らなかったようで、まったく恥ずかしい思いをしたそうです。そういう意味で、文化教養ゼミでそういう教養を身につけたい。シェイクスピアも出てきますし、それを非常にわかりやすく、非常に密度の高い講義で教えております。今日、学生諸君がどんな活躍をしてくれたのかわかりませんが、そこそこいい対応でやってくれたのではないかと思います。４月から始まってたった２ヶ月ですが、今、私が大学に来ますと学生の４０，５０％ぐらいは「おはようございます。」と言ってくれますし、なかなかさわやかな態度で接してくれます。人づくりということが文化教養ゼミの中でかなりできてきているのではないかと思います。事業を通じての社会貢献というのと文化教養を身につけた、しかも意欲的な学生を文化教養ゼミで育てていこうとしております。そして、さらに社会福祉等にも貢献できるという形になろうかと思いますが、このときの基本の１つに技術的にもそういうものを支えるものがないと困ります。それがもう１つの情報教育ということでありまして、定道学長は京都大学時代に日本でトップバッターと言っていいと思います。すばらしい遠隔講義システムを完成されました。これは当時、京都大学の工学部を抜いておりました。その遠隔講義システムのさらにバージョンアップしたものが今日ご覧いただいた無線LANによる講義システムです。これを仕上げるにはソフトはなかなか大変でありますが、学生諸君はすでにパソコンに通じておりますから、これからの社会の中で彼らが事業貢献をし、身につけた教養を生かしていくときにそういう情報システムが使えるようになる。このシステムそのものは定道先生のアイディアでありまして、そのすごさは朝日新聞の社説欄で紹介されておりました。そういうものを使ってここでは南部さんが作られたような会社、あるいは志の高い気持ちで事業に貢献する、事業を通じて社会に貢献をする、そういう人を作っていこうとしているのがこの大学であろうという気がいたしております。

定道学長：どうもありがとうございます。経営学部のカリキュラムの中に、事業貢献論、事業創成論、共生経営、経営倫理、ベンチャービジネス、つまり社会に貢献でき、それに関係する科目がこのように並んでおりまして、その中で、赤岡先生には今現在、事業貢献論、これは独自のテキストを作っていただきまして、それを講義なさっておられます。文化教養ゼミにつきましても、星城大学の経営学部はすべて独自のテキスト、つまり星城大学の人づくりは他の人の書いた本で教えるのではなくて、専任教員が、教える人が自らオリジナルテキストを作って教えています。そうすることによって、星城大学の人づくりの内容、質を世間に公表しようと考えております。そんな意味で赤岡先生の人づくりのお話というのは経営学部で実現されつつあります。それから先ほど上杉鷹山のお話がございましたが、これは皆さんも上杉鷹山の言葉かどうかご存じないかと思いますが、「なせば成る。なさねば成らぬ何事も、なさぬは人のなさぬなりけり」があります。つまり、やる気がなければ何もならない、つまり、これは起業家、創業者の精神であり、あるいはベンチャーの精神であります。ですから上杉鷹山がいかに重要なことを申されていたかということを肝に銘じていただきたく思います。これは実は私の座右の銘でもあります。

それでは最後になりますが、南部さんのほうから星城大学にご注文といいますか、あるいはご希望といいますか、何か一言お願いいたします。

南部代表：社会貢献をする、あるいはいろんな意味で文化を創造する、これには勇気がいると思います。必ず、事業をやっていますと、「何でそんなことするの」と銀行からも批判を受けるかもしれない。僕は最終的にここの卒業生が勇気をもって自分の志に対して戦う、それを行動学として卒業生が学んでいくというのができればいいなと思います。知識も大切だけれども、知識よりも行動が勝るというのが非常にいいかなと思います。僕は５年に１度ぐらい松下村塾に行くのですが、鷹山の言葉を聞きながら、僕の好きな言葉がふっと浮かんできました。松下村塾の有名な言葉ですが「知識をつけることは行動することの始まりであり、行動することはつけた知識を完成させることである。行わなければ知っているとは言えない。知っていても行わないのはまだ知らないのと同じである。知って行ってこそ本当の智恵である。」これは社会貢献をするということは非常に勇気がいる、勇気に行動というのが加わるといいのではないかと思います。

定道学長：ここで、まとめをさせていただきますが、独断と偏見でまとめますのでご了承願いたいと思います。

ご存知のように、日本経済はバブルがはじけました。その結果、銀行は体たらく、しかも最近では、東芝、NECが２万人の人員削減、松下が終身雇用制をとりやめました。つまり、バブル以前は会社中心の経済だった。大学は会社に貢献する人材を作っておりました。ところが、バブルがはじけまして、その「会社」がひっくり返り、これからは「社会」に貢献する人材を作っていかねばならない。ですから、これからの人材は、会社に入っても終身雇用ではないのですから、自分自身のプロフェッショナルな、得意な分野、それを社会にどのように生かしていくかということで、自分の人生観や社会に対する価値観を持ち、これで企業とともに社会に貢献していく、こういう時代になったのではないか。

そういう意味で、今日お二方からご丁寧なご忠告がありましたことを糧にしまして、星城大学はそのご教示に従った人材を育てていくように努力して参りたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。ご静聴ありがとうございました。

２００１年度　決算の概要

2001年度の決算が確定しましたのでその内容をご報告させていただきます。

資金収支計算書　当該会計年度の資金の動きを明らかにしたもので、教育研究活動及びその活動に付随するすべての収入・支出の内容が記載されており、消費収支計算書にはない前受金収入や施設・設備関係の支出等が計上されている。

消費収支計算書　帰属収入から基本金組み入れ額を控除し残りを『消費収入』として、人件費、教育研究経費、管理経費など当年度で消費する『消費支出』と対比させ、その均衡の状況や内容により、経営状況を示したもの。

資金収支計算書

＜収入の部＞

学生生徒納付金収入	1,188,025
補助金収入	865,686
前受金収入	722,016
事業収入	173,505
手数料収入	148,111
寄付金収入	91,007
その他の収入	7,176,460
前年度繰越支払資金	1,542,122
収入の部合計	11,906,931

＜支出の部＞

人件費支出	1,859,158
施設関係支出	1,257,679
設備関係支出	732,608
教育研究経費支出	422,616
管理経費支出	373,132
その他の支出	6,152,851
次年度繰越支払資金	1,108,887
支出の部合計	11,906,931

消費収支計算書

＜消費収入の部＞

学生生徒納付金	1,188,025
補助金	865,686
事業収入	173,505
手数料	148,111
寄付金	91,364
その他	328,266
帰属収入	2,794,956
基本金組入額合計	−985,717
消費収入の部合計	1,809,239

＜消費支出の部＞

人件費	1,862,645
教育研究経費	614,683
管理経費	383,067
その他	8,809
消費支出の部合計	2,869,203
当年度消費収入超過額	−1,059,964

貸借対照表

＜資産の部＞

固定資産	16,081,909
流動資産	2,616,652
合　計	18,698,561

＜負債・基本金・消費収支差額の部＞

固定負債	1,416,994
流動負債	2,055,337
基本金の部合計	12,503,269
消費収支差額	2,722,960
合　計	18,698,561

（単位：千円）

創立６０周年事業　寄附協力者御芳名

このたびは創立60周年記念事業寄附金にご協力いただき、誠に有り難うございます。ご芳志に厚く感謝いたします。この寄附金は、下記の平成13・14年度実施事業の一部として活用させていただいております。本学園といたしましても、星城大学開設により、更なる発展を目指し、新たな気持ちで日々努力をいたす所存でございます。何卒、今後とも皆様方のご支援、ご教導を賜りますよう伏してお願い申し上げます。この協力者御芳名は、平成14年4月10日までにお申し込みの方を掲載させていただきました。

＜寄附金合計＞　平成14年4月10日現在

個人合計	23,630,000円
団体合計	12,300,000円
企業合計	7,610,000円
総計	43,540,000円

＜平成13・14年度実施事業＞

星城大学	３号館建設
星城高校	校舎改築及び周辺整備事業の一貫として、通学路整備、グランド整備、空調工事
星の城幼稚園	園舎耐震リニューアル工事

◎個人（順不同・敬称略）

相羽　智
相羽　久光
青井　潔
青井　誠
青木絵り子
青木　和司
青木　鈴光
青木　良雄
青山　昭夫
縣　洋子
赤塚奈津子
浅井　薫子
浅井　清和
浅井　俊明
麻野　芳裕
安宅　重徳
安立　豊美
渥美　昌久
阿部　英一
安保　正
天野誠一郎
天野　幸雄
荒川　喜徳
有馬　孝之
粟田　敏裕
安藤　寿英
安藤　慎二
飯島　譽大
生田　納
池田　一夫
池田　皓彦
池田　茂樹
池戸　潤
伊佐　秋人
石川　修
石川　克紀
石川　勝彦
石川　晋輔
石川　宗一
石川　忠昭
石川　民雄
石川　憲夫
石川　弘
石川　博悦
石川　実明
石川美佐子
石川　光行
石川　泰士
石川　陽二
石黒　宏夫
井下　卓生
石田　泰城
石田　隆城
石田　直城
石田　英城
石田　正城
石田　充夫
石田原　覚
石塚加代子
石原　政則
磯貝　保彦
板橋　敏則
伊藤　克巳
伊藤義太郎
伊藤　耕司
伊藤　孝
伊藤　隆博
伊藤　高充
伊藤　成雄
伊藤久仁雄
伊藤　眞幸
伊藤　正人
伊藤　正治
伊藤　操
伊藤　由市
伊藤　祐助
伊藤　頼一
伊藤　良一
稲垣　清貴
稲垣　孝司
稲垣　武久
稲垣　美信
稲垣　洋一
稲田　滿雄
犬塚　一男
稲生真由美
井上　勝
井上　徳宏
猪股　一久
今平　靖
井本　正巳
岩瀬　孝行
岩瀬　徳夫
岩田　勝之
岩田　佳朗
岩田　重朗
岩田　隆喜
岩田　英俊
岩橋　和典
岩原　純
岩間　ちゑ
植田　研一
植松　文一
植松　康張
上村　恭司
上本　忠雄
牛島　義晃
後田　忠勝
内川　一雄
内海　清孝
梅村　多逸
浦野　了
海野　智子
海老原正博
遠藤　忠信
遠藤　博通
王隠堂康弘
大石　幸永
大岩　康幸
大北　仁信
大古　拓史
大嶌　進
大島　登
大島　正敏
大嶋　保平
大洲　久典
大須賀卓朗
大角　輝夫
太田　健一
太田　隆祥
大瀧　利行
大田黒誠哉
大竹　峰雄
大谷　幸秀
大野　豊久
大野　裕史
大橋　勇男
大前　光代
大見　淳司
大見　隆也
大森　芳昭
大山　浩吉
大山　康二
岡　利幸
小笠原浩二
小笠原貴美
岡田　泉
岡田　和夫
岡田　秀行
岡戸　雅弘
岡本　和利
小川　博
置田　弘一
沖田　昌宏
小栗　金美
小栗　孝次
尾崎　清彦
織田　晃
織田　信一
尾野　善代
小野　博通
小野　政範
小野田和成
小野田　実
折橋　育雄
甲斐　公久
各務　壽彦
加古　伸吾
加古　泰資
笠原　敏一
笠原　正男
梶川　敏男
片山笑美子
加藤　修
加藤勝二郎
加藤　幹一
加藤　清和
加藤　敬子
加藤　謙二
加藤　貞夫
加藤　茂利
加藤　順一
加藤　高幸
加藤　拓郎

加藤　敏治
加藤　知子
加藤　尚史
加藤　泰治
加藤　泰成
蟹井　和宏
蟹江　正延
蟹江　芳廣
金田　嘉清
金原　深志
加納　潤一
加納　幹也
鎌田　照美
神谷　和利
神谷　拓生
神谷　文雅
神谷　光鋭
神谷　泰代
片山　拓真
神谷　義一
亀井　邦孝
苅谷　京子
河合　照夫
河合　等
河崎　信行
川嶋太津夫
川出　芳義
川原　正嗣
川村　隆久
神戸　満
河村　晃子
菊池　岳士
菊池　康子
菊地　芳幸
喜多河四郎
北川　康男
北出　篤夫
北村　彰浩
北村美津江
鬼頭　克典
鬼頭　俊行
鬼頭　道明
木下　稚子
木船　威雄
木村　珠理
木村　正
木村　博哉
楠　治野
杳名　保男
久野　敬一
久保　善男
久保　強
久保田利政
久米　完明
久米佐紀子
久米　裕三
久米　好信
粂田　啓次
栗田　朗夫
栗原　貞夫
黒田　友子
黒田　幸雄
畔柳　司
桑名　正也
桑原　文男
桑山　秀夫
河野　春之
小崎　金之
越野　錆子
小島　敏嗣

小島　宏之
小島　文悟
児玉　美秋
後藤　金也
後藤　正己
後藤　安江
小林喜代之
小林　信子
小林　学
小林未奈子
小林　康男
小林　裕
小林　義春
小原　邦裕
小堀陽一朗
近藤　和久
近藤　健司
近藤　敏正
近藤　紀夫
近藤　秀人
近藤　誠
近藤　泰彦
近藤　吉広
近藤　吉美
斉田　康徳
齋藤　裕
坂井　清
酒井　利夫
酒井　行教
榊原　直美
榊原　麻希
榊原　正裕
榊原　良男
榊山　勇市
坂口　朝計
阪部　文彦
坂部　政信
先砥　久
作野　恒
佐久間里佳
佐々木和彦
佐々木文夫
佐藤清一郎
佐藤　貴世
佐藤　信義
佐藤　文夫
佐藤　安信
佐羽尾由紀子
皿井　直人
澤　保司
澤田　治
重野　州弘
重野ちゑ子
重信　泰男
柴田　英治
柴田　清
柴田　政寛
柴田　康仁
柴田　泰孝
柴山　養一
島田久美子
島田　更司
清水　和男
清水　康夫
下田　祐志
下村　卓也
宗圓　晋児
周本　伸二
庄司　卓
庄司　良雄

城野　永利
城森　孝仁
神　孝
菅　雅子
須賀　安治
菅　陽子
杉浦　和彦
杉浦　要
杉浦　智子
杉浦　成人
杉浦　信道
杉浦　康治
杉浦　陽一
杉江　渡
杉田喜與春
杉本　篤
杉本　久弥
杉山　善紘
鈴木　勇
鈴木伊津夫
鈴木　英司
鈴木　孝彦
鈴木　孝幸
鈴木千鶴子
鈴木　敏文
鈴木　秀彦
鈴木　広明
鈴木真砂人
鈴木　光保
鈴木　康文
鈴木　豊
角　敏昭
関口　恒夫
仙波　英雄
祖父江貴清
高井　修
高井　太
高木　照記
高木　俊雄
高﨑　光兼
高須　雅治
高橋　麻男
高橋　薫
高橋美和子
高村　和弘
高山　曜三
高之瀬　明
竹内　克弘
竹内　啓元
竹内　宣久
竹内　利和
竹内　直
竹内　伸行
竹内　裕
竹内　雅紀
武岡　明
竹浪　一良
竹村　輝彦
忠内　悦子
龍田　昭一
田中美津生
田中　裕二
田中　善夫
棚橋　賢司
谷村　隆次
玉置　潔
玉置　治子
多和田　眞
丹下　一忠
千国　朝子

茶谷　滋夫
月岡　享博
築山　秀司
柘植　則久
都築　俊雄
鍔本　幹夫
津村　忠良
鶴田　直樹
出井　孝司
寺沢　久能
寺島　正悦
天満　成郎
土井　進
土井　友二
藤堂　正視
遠山　武雄
利國　浩象
富迫　久男
富田　昇司
冨田　孝視
鳥居　敏樹
内藤　幸三
内藤　史朗
内藤　義和
永井　忠義
永井　俊男
永井　正昭
中石　勝也
長岡　泰彦
中川　三郎
長坂　一興
永坂　武
長坂　正一
永澤　規也
中島　英司
中島　敏秀
中田　克治
永田　博康
永田　政也
長田　守夫
中西　章男
中根　逸朗
中野　貴光
中野　正則
中村　勝男
中村　清美
長村　隆司
中村　卓也
中村　武男
中村　則秋
仲矢　英雄
中山　真一
成田　等
成田　恵五
成田　幸和
成瀬　孝洋
新美　恭二
西　源三郎
西井　幸男
西尾喜久雄
西梶　利昭
西川　憲治
二宮　真一
二宮眞由美
二村　淳二
仁村　徹
二村　正一
入交　美仁
丹羽　正
野口　武夫

野々垣常正
野々山明史
野々山統理子
野々山親弘
野々山　勉
野々山　優
野原　宏貞
信田　英司
野村幸一郎
野村　康
芳賀　鉄也
橋本　雅義
服部　興治
服部　博光
服部　昌義
花井　紀一
花井　典彦
花北　昭二
馬場　和徳
浜島　貴正
浜島美和子
濱田　博
早川貴志子
早川　元三
早川　公二
林　信次
林　信敏
林　尚志
林　宏
林　安二
林田美恵子
原　三千穂
原　昌
原口　昌代
原田　栄一
原田　英治
原田　佳苗
原田　幸男
春木　利久
伴　利治
坂　敏彦
伴　洋義
坂野　郁人
半谷　眞宏
樋口　匡
久田　知則
日高　文彦
尾藤　連
兵藤　辰美
兵藤　直子
平岩　厚三
平岩　英久
平尾　操
平子　修三
平澤　小農
平野　恒章
平林　光義
蛭牟田弘樹
弘中　弘満
深尾　惠洋
深川　悦司
深見　武
深見　正明
深谷　径弘
深谷　俊子
深谷　泰郎
福岡　光雄
福田佐由利
福田　尚幸
福留　健夫

藤　明彦
藤井　厚志
藤川　聖
藤田　克己
藤田　悦啓
藤田　徹
藤田美穂子
藤村　光晴
藤原　俊孝
二村　明美
古川　金憲
古川　政法
堀　葵
堀　益美
本田　美好
本間　実
前　静子
前川　弘美
前田　卓巳
前田　俊子
前田　昌宏
牧　賢治
牧嶋　俊夫
牧野　幸男
増岡　良一
増川　通
増田　正夫
枡田　義則
桝見　道広
間瀬　篤
間瀬　彰三
間瀬　文平
間瀬　政明
松井　篤
松浦　勝正
松尾　彰人
松岡　栄治
松崎　三二
松下　至宏
松田　敏孝
松田　仁志
松野　貢治
丸山　倫子
三浦　榮二
水嵜　鋭正
水谷　松光
水野　鋭治
水野　俊彦
水野　正士
水野　芳男
三根一比古
峯澤　基夫
美馬　敏之
宮内　秀弘
宮﨑　定
宮崎　正二
宮崎美智子
宮田　和夫
宮地　敦子
宮野　義勝
宮原　次昭
宮本　和秀
宮本　武志
三輪　俊和
武藤　英志
村上　雅則
村山　和幸
望月　継俊
望月　文悟
元野　博文

本藤愉美子
本吉　武久
森　一美
森　喜代仁
森　利之
森　典孝
森川　孝典
森下　昇
森田　章義
森部　民也
森本　靖典
八木　信夫
安井　伸司
安井　洋治
安田　隆信
矢田　吉彦
柳田　道雄
矢野　謹一
藪田　敬治
藪見　富美
山家　光男
山口　清秀
山口　幸治
山口　重明
山口　康博
山下　戒典
山下　松邦
山田　紋子
山田　勝之
山田　清美
山田　淑江
山田　信絵
山田　敏彦
山田　直
山田　英之
山田　勝
山田　康光
山田　芳樹
山中　昭二
山村　博男
山本　邦雄
山本　秀一
山本　武
山本　哲寿
山元　弘二
山本　泰弘
湯澤　明
百合草敏博
万木　啓彰
横井　隆幸
横井　文典
横山　弘
吉川　典延
吉川　泰司
吉沢則比古
吉田千日男
吉田　富次
吉田　正光
吉利　用邦
吉野　廣守
吉本　昌博
米山　慎悟
若林　幸弘
若山　義一
渡辺　格郎
渡邊　和美
渡辺　清克
渡邊　健二
渡邊　祥代
渡辺　真悟

渡辺　照水
渡邊　広信
渡邊　正典
渡辺　陸久
渡辺れい子
M・スナイダー
S・ビーターセン
タケウチ　カズヒロ
ツゲ　トモユキ
トミタ　ヤスノリ
ハラ　マユミ
カクバリ　タカコ
サクラギ　ケンイチロウ

◎団体

高校　父母の会
高校　星辰会
中学　後援会
短大　後援会

◎企業（順不同）

イケダ写真館
ノノヤマ洋服㈱
㈱内山教育産業
㈲フクオン
足立工業㈱
サンメッセ㈱
㈱中京銀行
東海ホリイ㈱
東急鯱バス㈱
プリンススポーツ
平林移動集団検診所
㈱日立ビルシステム
㈱スタジオスピーク
㈲アートクリーン工業
㈱ライフビルサービス
㈱荒川印刷
笹徳印刷㈱
角田印刷
東洋カーテン
(資)加藤商店
㈱アトアップ
㈱東海ブック
協同乳業㈱
名鉄環境造園
㈱貿易広告社
㈲ワック
㈲豊田フードサービス
㈱トライバーサービス
㈲レコーディングアロー
㈱メディカルシステムズ
㈱三晃社
オオブユニティ㈱
㈱正文館書店
交通広告社
㈱リクルート本社
戸田建設㈱
藤吉工業㈱
大日本紙業㈱
イシタ自動車
㈱チューエツ
㈲日正社
㈲名東チャイルドー社
㈱名古屋観光ホテル
㈱ジャパンビバレッジ
名古屋ビルサービス㈱
㈱ヘラルドコーポレーション
(財)日本開発構想研究所